プロローグ

野に咲くクリスマスローズを思い浮かべて下さい。楚々とした野趣あふれる姿、日本人の心の真底にある“詫び”や“寂び”といった感性を呼び起こさせる草姿や花色・・・。ハイブリッド種にはない楚々とした上品さがあります。クリスマスローズの新しい扉が開きだします。

☆Helleborus の原種

ホームページ（検索図鑑）にも記載されていますが、Helleborus の原種は現在確認されているもので 25 種、そのほとんどは、ヨーロッパ地中海やアドリア海沿岸の地域に自生しています。また、遠く中国の四川省・甘粛省のチベット東端地域に隔離されたように“チベタヌス”が自生しています。

☆原種の魅力

プロローグでも紹介しましたように“野趣あふれる姿”が人気の“山野草”と重なるのではないでしょうか。日本人の花の文化は、茶道の“茶花”から始まり、何気ない“野の花”を生け“おもてなし”の心を表現しました。そのように、情緒豊かな心を持つ私たちが行き着くところは楚々とした“原種”の世界でしょう。

☆栽培方法早見表

本来ならば、品種ごとの栽培方法を示す事が理想と考えていますが、種を大きく大別し栽培方法を記述したいと思います。

栽培分類	品種名
A	ニゲル・アーグチフォリウス・フェチダス・リビダス
B ハイブリッドの 育て方に準拠	オリエンタリス・オドルス・プルプラスケンス・オキシデンタリス・デュメトルム シクロフィルス・ビリディス・リグリクス・ボッコネイ・アブルジクス
C	クロアチカス・アトロルーベンス・ムルチフィダス・トルカ―タス・セルビクム
D	チベタヌス・ベシカリウス

栽培方法　栽培分類 A　ニゲル・アーグチフォリウス・フェチダス・リビダス

有茎種グループの栽培方法になります“有茎種”の栽培は難しいとおっしゃる方が圧倒的に多い事に驚かされます。栽培のポイントを押さえてしまえば容易に栽培できる品種です。特にこの種は、ガーデン（庭）植栽では圧倒的な存在感（インパクト）を与えてくます。

〈入手方法〉

園芸店やガーデンセンターで秋口になるとポット苗（9cm）を入手できます。苗の選び方として、下葉の枯れ込みがなく葉艶の良いものを選びます。有茎種の場合、根詰まりしている苗を導入する場合が多いのですが、その場合、即座に植え替え（既存の大きさの 2 倍程度の鉢に移植又は庭植え）します。根詰まりによって酸素欠乏（窒息状態）を起こし、枯変をおこす可能性が高くなり“突然死”とも言われる状態になります。その事から、気難しい植物と言われています。裏を返せば、根詰まり前にルート（根）の伸びるスペースを与える事です。栽培上、重要なポイントになります。

〈季節ごとの育て方〉

① 冬～春（12～4 月）開花期の管理

ニゲルを含むこの品種は、早いものは 12 月に開花をはじめ、温暖な地域では戸外で開花をはじめます。高冷地や寒冷地での栽培は 12 月に入ったら室内・温室に取り込むようにします。リビダスのように耐寒性に欠ける種は早めに室内に移動するようにしましょう。庭植えの場合、株元のマルチングや冷たい寒風を避けるため防風ネットなどで保護します。開花が始まるこの時期、良質の緩効性肥料（60～90 日）を追肥として与えて下さい。潅水は表土が白く乾いてきたらたっぷりと与えて下さい。

有茎種の場合、花後に花茎を切除しますが、その時のポイントとして“更新芽”があるかどうか確認してください。更新芽があれば、株元から花茎を切除します。いつまでも咲き終わった花茎を付けておくと翌年の開花が見込めません。切除した花はテーブルリースや押し花に活用しましょう。

② 春～夏（5～8 月）開花後の管理

他の、クリスマスローズと違い、この時期、日に良く当てて育てるのがポイントになります。ただし、空中湿度が極端に高くなる梅雨の時期は、雨水の当らない風通しの良い場所に退避してあげて

下さい。この時期、肥料は与えません。この品種、特にアブラムシが付きやすいので、アセフェート（オルトラン）系の薬剤を撒いて防虫防除を行います。

更新芽が異常に発生する場合があります。その場合、翌年の開花期に花をつけない場合があります。その際、この期間中に2～3芽ほど大きい芽を残すように、小さな芽をピンチ（摘み取り）すると良いでしょう。

③ 秋～冬（9～11 月）花芽形成の時期

この種のもっとも生長する時期です。日に良く当て健康的な株を作るように努力しましょう。根詰まりが起きているようであれば、植え替えを行う時期でもあります。施肥はバランスの良い良質の緩効性肥料（60～90 日）を与えます。活発に活動していますので、水切れを起こさないように、潅水は乾いたらたっぷりと与えます。

〈基本培養土〉

ニゲルを含む有茎種の場合、特に鉢内の気相性を高める事と、鉢内の排水性を向上させる工夫が必要になります。特に夏季は気温・湿度が共に高く“根ぐされ”の原因になりますので培用土に一定の工夫が必要になります。ここでは一般に入手しやすい用土を利用した配合例を紹介します。

硬質赤玉土（小粒）	60%	
日光砂（小粒）	10%	硬質鹿沼土でも良い
軽　石（小粒）	10%	*軽石を使用しない場合は日光砂 20%
ココピート	20%	
A グループ培養土	100%	

PH 調整：仕上がった配合用土に“牡蠣ガラ石灰”を3%程度添加します。

有茎種を栽培する場合、土壌酸度（PH）を 6.2 程度に調整するのが好ましい。フェチダスやリヴィダスの自生地（スペイン・ポルトガル）は総じて石灰岩（ライム土壌）むき出しの土壌に、アーグチフォリウスの自生するコルシカ・サルデーニャ両島とも石灰岩で形成されている島々です。勿論、石灰岩の上に堆積した土壌と解釈して下さい。フランスの友人 JP.オジェ氏の自生地測定によると平均値で PH6.2 と記録されています。

栽培方法　栽培分類 B　オリエンタリス・オドルス・プルプラスケンス・オキシデンタリス・デュメトルム

シクロフィルス・ビリディス・リグリクス・ボッコネイ・アブルジクス

この種は、原種でありながら比較的容易に栽培できるグループで、ほぼオリエンタリスハイブリッドの栽培法に準じます。原種栽培の入門編として、さらには原種の異種間交配の片親としてその強健性が導入されるでしょう。

〈入手方法〉クリスマスローズ専門店や直売をしているナーセリーなど、最近は稀ですが園芸店やガーデンセンターなどでも入手が可能になっています。なかなか、開花株の販売品は入手するのが難しい。

〈季節ごとの育て方〉

① 冬～春（12～4月）開花期の管理

強い北風や霜を避け、なるべく日光の当たる場所に置きます。潅水は鉢土の表面が白くなってきたら、天気の良い日の午前中に充分に与えます。開花中のものには追肥として肥料（注1）を与えます。

クリスマスローズは花が終わっても花弁（植物学的には、がく片）が落ちません。種を採る必要がなければ、株元から早めに切り取ったほうが株の為には良いでしょう。切り取った花を切花として楽しむのであれば、42度程度のお湯に花首まで漬け、翌朝まで浸漬し、水揚げします。最近では、押し花の素材として利用される方が増えています。

（注1）　この時期の肥料は要素バランスの良い良質の緩効性肥料（60日～90日）を与える。

② 春～夏（5～8月）開花後の管理

直射日光を避け、風通しの良い場所に置きます。直射日光のもとで栽培している場合は50％（7月中旬～9月上旬は70％）程度の遮光をします。潅水は鉢土の表面が白くなってきたら、夕方から夜に充分に与えます。暖地（注2）の場合、この時期に肥料は与えません。高冷地や寒冷地（注2）の場合、7・8月を除き薄い液肥を与えます。

（注2）　暖地⇒関東甲信越・中部・関西・中国・四国・九州の標高500m以下の平坦部

高冷地・寒冷地⇒暖地表記地域の標高500mを超える地域と東北・北海道

＊あくまで、おおよその目安です。参考にして下さい。

③ 秋～冬（9～11月）の管理

出来るだけ日光の当たる場所に置きます。潅水は鉢土の表面が白くなってきたら、天気の良い日の午前中に充分に与えます。肥料は良質の緩効性肥料（60～90日）を元肥として与えます。

〈基本培養土〉

各々の種が、このグループに存在していますが、総じて栽培が容易です。自生地の多くはグラスに覆われる平原～疎林のような場所に自生しています。このグループのほとんどの種が弱酸性（PH5.2～5.6）から弱アルカリ（PH5.7～6.5）土壌の範囲に自生しています。培養土は有茎種同様の配合で良いと思います。

硬質赤玉土（小粒）	60%	
日光砂（小粒）	10%	硬質鹿沼土でも良い
軽　石（小粒）	10%	＊軽石を使用しない場合は日光砂 20%
ココピート	20%	
B グループ培養土	100%	

PH 調整：仕上がった培養土に“牡蠣ガラ石灰”を 0～5%程度添加します。

種ごとの PH 調整割合

●PH 調整の必要が無い種：オリエンタリス・オドルス

●PH 調整 2～3%添加：オキシデンタリス・デュメトルム・シクロフィルス・ビリディス

●PH 調整 3～5%添加：プルプラスケンス・リグリクス・ボッコネイ・アブルジクス

栽培方法　栽培分類 C　クロアチカス・アトロルーベンス・ムルチフィダス・トルカ―タスセルビクム

この種は、旧ユーゴスラビア（セルビア・モンテネグロ・クロアチア・スロベニア・ボスニア）に自生する種で標高 1,000m 付近に自生します。地中海性の気候によって夏の湿度が低い事から、日本国内で栽培する場合、夏の高温多湿の環境を改善する必要があります。また、生育が緩慢な事も相まって、開花まで4～5 年ほどかかる。

〈入手方法〉クリスマスローズ専門店や直売可能なナーセリー等に問合わせすると良い。特に優良個体等は入手が困難なものもあります。

〈季節ごとの育て方〉

① 冬～春（12～4 月）開花期の管理

この時期から、新葉の展開が始まり 3～4 月に開花期を迎えます。植え替えもこの時期がベストで、傷んだ葉や根を整理し、切除した部位にペースト状にした殺菌剤（ベンレート・ロブラール等）を塗布し、植え替えを行います。植え込みが済んだら 2～3 日後に活力剤（ネオグリーン・メネデール）の 200～300 倍希釈液を約 1ヵ月間、週一回土壌潅注する。その後に施肥（90 日タイプ緩効性肥料）を行います。潅水は鉢の表面が白く乾いてきたら、たっぷりと潅水しましょう。特にこの種は、灰色かびや軟腐病に罹り易いので株元の通気を十分に取る事が要求されます。

② 春～夏（5～8 月）開花後の管理

開花が終了したら、必ず花茎を切除して更新芽の生育を促します。タネ採取の為に花茎を切除できない場合、交配・受粉時より採種の時まで活力剤（ネオグリーン・メネデール）の 200～300 倍希釈液を潅水代わりに与えると良い結果が得られます。この時期、更新した葉を失う事のないよう注意が必要です。通風の良い明るい日陰（直射は絶対に避ける）に移し管理します。
8 月を乗り切れば翌年の充実した花や株が期待できます。施肥は置き肥はやめて薄い液肥（基定倍率の 3 倍ほどに希釈したもの）を週一回のペースで与え、健全な葉を維持します。潅水は用土が白く乾燥したらたっぷりと与える。

③　秋～冬（9～11 月）花芽形成の時期

夜温が徐々に下がってくるこの時期、もっとも生育が活発になります。状態に変化はありませんが、地下茎（根）がどんどん伸びてきます。ですから、この時期にリン・カリ成分の多い緩効性肥料（90 日）を与えます。春に植え替えが出来なかった株は、この時期に植え替えを行います。植え替え方法は①で示した通りです。潅水は鉢の表面が白く乾いてきたら、たっぷりと潅水しましょう。

〈基本培養土〉

このグループは、クロアチア・スロベニア・ボスニア・モンテネグロ・セルビア・ヘルツェゴヴィナなど、旧ユーゴスラビアの標高 800m～1100m 付近の冷涼な環境に自生する種です。栽培は亜高山帯の植物に準じた栽培が要求されます。通気性・排水性に優れた培養土を調整・配合します。自生地の土壌酸度は PH6.0～6.5の弱アルカリですので、PH 調整が必要になります。

硬質赤玉土（小粒）	50%	
日光砂（小粒）	30%	硬質鹿沼土でも良い
ココピート	20%	
C グループ培養土	100%	

PH 調整：仕上がった培養土に“牡蠣ガラ石灰”を3～5%程度添加します。

栽培方法　栽培分類 D　チベタヌス

【チベタヌス】

中国の四川省や甘粛省のチベット東端標高1,200m～2,300m付近に自生します。この地域は二季性（雨季・乾季）の気候で、日本のように四季はありません。自生地では雨季の頃、一斉に発葉をはじめ開花に至ります。乾季の時期は落葉し地上部は全く見られなくなります。しかし、国内で栽培する場合、最も注意することは夏期に“落葉させない”事が要求されます。秋になると中国からの輸入苗が量販店を中心に安価で販売されますが、品質面で大きな問題があります。種子からの育苗は5年から7年ほど開花までの期間が必要。いずれにしても原種の中で最も栽培が難しい種である事に違いありません。

〈入手方法〉クリスマスローズ専門店や直売可能なナーセリー等に問合わせすると良い。秋には園芸店やガーデンセンターで輸入苗の販売もある。

〈季節ごとの育て方〉

① 冬～春（12～4 月）開花期の管理

12 月には低温で花芽の肥大が完了し、1 月から 4 月の時期に徐々に発葉し開花を迎えます。この時期は植え替えの適期となります。発葉直前に植え替えを行います。この時、古葉や傷んだ根を取り除き殺菌剤（ベンレート・ロブラール等）を塗布します。肥大した花芽や葉芽を地上に見える程度に植え付けます。植え付けて 2～3 日後に活力剤（ネオグリーン・メネデール）の 200～300 倍希釈液を約 1 ヵ月間、週一回土壌潅注する。その後に施肥（90 日タイプ緩効性肥料）を行います。潅水は十分に与えます。この時期、鉢内が乾燥したり空中湿度が不足すると草丈や花が“わい化”し、時には開花できずにしおれてしまう事もあります。潤湿な状態を保つ事が要求されます。

② 春～夏（5～8 月）開花後の管理

自生地では、この時期から落葉します。国内で栽培する場合、もっとも注意をしなければならない季節です。落葉させないよう、通風良好な明るい日陰（直射禁物）に移し、管理します。開花が終了したら、必ず花茎を切除して更新芽の生育を促します。タネ採取の為に花茎を切除できない場合、交配・受粉時より採種の時まで活力剤（ネオグリーン・メネデール）の 200～300 倍希釈液を潅水代わりに与えると良い結果が得られます。この時期の潅水も①同様、十分与え潤湿な状態を

保つ事が肝要です。施肥は置き肥を避け、薄い液肥（基定倍率の 3 倍ほどに希釈したもの）を週一回のペースで与え、健全な葉を維持します。

③　秋～冬（9～11 月）花芽形成の時期

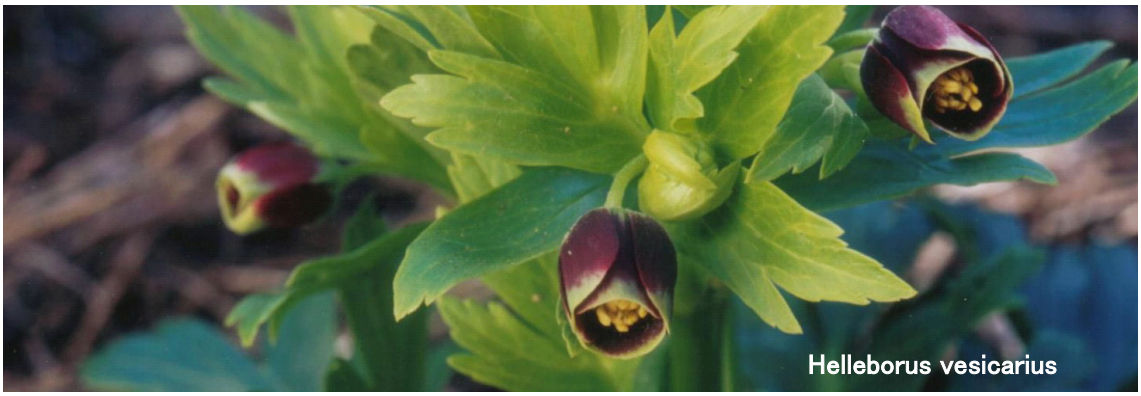
引き続き明るい日陰で管理しますが、夜温が20℃を下回るようになったら、屋外又は日に良く当て栽培していきます。1～2回ほど霜に当てたら屋内（温室など）に取り込みます。①で植え替えが出来なかった株は、発葉前のこの時期に植え替えをします。植え替え後の管理は①に準じる。冷え込みが増すにつれて花芽や葉芽が肥大をはじめ、11月には花芽が形成した事が確認できます。この時期にリン・カリ成分の多い緩効性肥料（90日）を与え、開花期を迎えるようにしましょう。潅水は引き続き十分与え潤湿な状態を保ちましょう。

〈基本培養土〉

チベタヌスは中国の四川省・甘粛省のチベット東端、標高 1,200m～2,300m付近の沢筋や湧水のある緩斜面から急斜面の雑木林に多くが自生しています。土壌酸度についての測定記述が無いので不明ですが、自生環境から推測すると落ち葉などの堆積層が土壌のベースになっていると思われる。それらの事から弱酸性（PH5.5～6.0）と推測される。生育期間（雨季）は多雨で空中湿度も高い環境です。栽培には年間を通じ潤湿な環境が要求されます。気相性と保水性と言う、相反する特性を有効に機能させる用土配合が要求されます。

赤玉土（小粒）	50%	
鹿沼土（無選別）	20%	
キノコ培地	30%	当ガーデンのオリジナル
チベタヌス培養土	100%	

栽培方法　栽培分類 D　ベシカリウス



【ベシカリウス】

　トルコ・シリアの砂礫地域（半砂漠）に自生するクリスマスローズです。年間雨量が極端に少ない地域で、原種のチューリップなどと共存しています。チベタヌス同様落葉します。地下茎は長く“ひも状”に伸びて行きます。これは地中深く水分を求めて行く為でしょう。国内では鉢で開花した例は稀で、開花事例のほとんどは地面への植栽によるものです。葉もトリカブトやキンバイの葉に似ているが、葉が厚く“多肉”を思わせる。乾燥に耐えうる作りになっているのだろう。

〈入手方法〉苗の入手は難しい。ヨーロッパの種苗会社から種の導入可能。ただし、開花まで7年ほどの期間がかかる。

〈季節ごとの育て方〉

　残念ながら、筆者も開花に至っていないために栽培方法に関しては明確な栽培方法を書く事が出来ません。近い将来に期待して下さい。

準備中

参考文献：夢花人Homepage
文責：浅間クリスマスローズガーデン
最上　友行